

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
しー2	四逆湯	甘草（甘平）2g・乾姜（辛温）1.5g・附子（辛温）生用0.2g 上の3味を水120mlを以って煮て、50mlとなし、滓を去り2回に分けて温服する。
弁太陽病脈証併治上第五第30条（傷寒論）		
「傷寒脈浮、自汗出で小便数、心煩、微惡寒、脚攣急するに反って桂枝湯を与えて其の表を攻めんと欲するは此れ誤り也。之を得て便ち厥し咽中乾き煩躁吐逆する者は甘草乾姜湯を作り之を与え以って其の陽を復す。若し厥癒え足温かき者は更に芍薬甘草湯を作りて之を与えれば、其の脚即ち伸ぶ。若し胃氣和せず譫語する者は小しく調胃承氣湯を与う。若し重ねて汗を發し復焼針を加うる者は四逆湯之を主る。」		
自汗出で、小便数、攣急、反って、便ち、以って、若し、譫語、小しく、復、主る		
<p>解説 傷寒で脈が浮き、自然と汗が出て、小便の回数が多く、胸苦しく、少し悪寒がして、脚が突っ張ってけいれんを起こしている様な場合に、反って桂枝湯を与えて発汗させるのは、治療の誤りである。桂枝湯を服すると手足が冷たくなり、咽が乾いて苦しくなり、吐き戻す者には、甘草乾姜湯を作って服用させて、陽気のめぐりをよくしてやればよい。もし甘草乾姜湯を服用して、手足の冷えが癒えて足が温かくなった者で、脚攣急の治らないものには、芍薬甘草湯を作って服用させるとよい。そうすれば脚の攣急が治って伸びるようになる。この際に、もし胃の働きが調和していないので、うわごとをいうものには、少し調胃承氣湯を与えてやればよい。もしも何度も発汗させて、その上に焼針を加えて、そのためにぐったりして手足が冷えるものには、四逆湯が主治する。</p>		
<p>桂枝湯証には、身体疼痛、脚の引きつりはない。傷寒による身体疼痛、脚の引きつりは、陽気の停滞によるもので、脈は緊である。しかしながらこの場合の脈は浮であるので、心煩、脚の引きつりは、少陰経の陰液が不足して陽熱が上擾して、筋脈が滋養されなくなることによる。また小便頻回、自汗、微惡寒風は、少陰経の陽気が虚して固摂、温煦機能が低下していることによる。このように太陽中風で、裏すなわち少陰経の陰陽両虚がある時は、桂枝加附子湯で扶正祛邪すればよい。この少陰経陰陽両虚を無視して桂枝湯で発汗すると、益々陰陽共に虚して陽虚による四肢厥冷（手足が冷えあがる）、陰液も虚して裏の血虚のために脚のひきつりが生じたり（この場合の脈は浮である）、上焦を滋潤できなくなり、咽中がパサパサに乾くが飲みたがらない。また陰陽両虚、心腎不交により、煩躁、吐き気、動悸が現われる。このような場合は、先ず甘草乾姜湯で温めて、陽気が正常に回復した後に、芍薬甘草湯で血虚を回復させると、筋脈は滋潤し脚の攣急も緩解して自由に動かせるようになる。傷寒による身体疼痛、脚のひきつりは、陽気の滞りによるもので、この場合の脈は緊である。もし、甘草乾姜湯による扶陽が過ぎると、胃に熱が滞り、胃熱となりうわごと、大便乾結となった場合は、調胃承氣湯を少し与えて実熱を瀉し、胃を乾かさなないようにすれば、胃氣は調和し、うわごと自然に止まる。もし何度も発汗をさせて、その上に焼針（発汗させるために行う加熱療法）を加えて陽気が大いに虚して、甘草乾姜湯で扶陽しても効果が無いほど陽虚が亢じて裏寒証となった場合は、四逆湯で救治する。</p>		
<p>参考 芍薬甘草湯は、血虚による筋肉のひきつりに用い、手足や肩の痛み、腹痛などに応用する。もし悪寒などの冷えの症状があれば、附子を加えて芍薬甘草附子湯として用いる。</p>		
四逆湯証		
<p>新古方薬囊によれば「下痢の回数が激しく、出ざる量多くして手足冷える者。手足伸びない者。ムカムカと吐き氣ありて、手足寒え、發熱あつて寒氣し、身軀だるく、口中乾いても水を欲しがらない者。熱あつて汗多く出で、腹中痛み、或は腹下り、寒氣して手足が強く冷える者。腹大いに張りて大便出でざれ共、下劑を掛ければ下痢を起こして、容易に止まらなくなる者。幾度も汗を取った爲、手足が冷えて元氣の無くなった者。本方の證があつて便通無い者あり、下痢劇しき者あり、1日1回位の者もあり、小便は不利する者は少なし。脈は沈の者多し。本方は平常血の少ない者の風邪、下痢等には甚だ効あり。」と記されている。</p>		
弁太陽病脈証併治中第六第64条（傷寒論）		
「傷寒医之を下し、続いて下痢を得、清穀止まず、身疼痛する者は、急に当に裏を救うべし、後、身疼痛し清便自ら調う者は急に当に表を救うべし、裏を救うには四逆湯に宜しく、表を救うには桂枝湯に宜し。」		
<p>解説 寒に侵されて風を引いているのに、医者が下しをかけたために引き続いて下痢をして、不消化便が止まらなくなって、裏が虚してしまった。そして表証の体がうずき痛んでいる者は、急いで裏を治してやればよい。その後で身体がうずき痛む者で、不消化便が治った者には、急いで表を治してやるべきである。裏を治すのには四逆湯がよく、表を治すのには、桂枝湯がよいのである。裏実と表証が同時にある時は、先に表証を治し、その後に裏実を治療する（先表後裏）が、本条文のように表証と裏虚が同時にある時には、裏虚を先に治して、その後に表証を治療する（先裏後表）。先に治療しなければならぬ裏虚を差し置いて発表解表を先にすれば、病状が悪化して虚脱（ショック）を起こしてしまう。先に四逆湯で回陽救逆し、陽が回復して清穀下痢が止まったら、桂枝湯を用いて解表すれば、身体痛も治る（先表後裏）。</p>		
弁太陽病脈証併治中第六第65条（傷寒論）		
「病發熱頭痛、脈反って沈、若し瘥えず身体疼痛するは当に其の裏を救うべし。四逆湯に宜し。」		
<p>解説 病状が発熱して、頭痛があつて、この症状が表証であるならば脈が浮であるはずであるのに、脈が反って沈んでいて、もしも病の症状が治らなくて、身体が疼痛するのは、これは裏寒から来ているのであるから、当然裏を治してやるべきである。それには四逆湯がよい。</p> <p>發熱、頭痛は表証であるので、脈は浮になるはずであるが、沈になっている。脈の沈は少陰病で、太陽少陰合病である。これは麻黄附子細辛湯で治るはずである。ところが治らなければ、身体疼痛の表証があつても少陰裏寒がもっとひどいので、回陽救逆の四逆湯が必要となる。それによって軽い太陽表証であれば自然に消えてしまうはずである。</p>		
四逆湯証		
<p>下痢、手足の冷え、悪寒、身体がだるい、口が乾いても飲みたがらない、元氣が無い、うとうと眠ることが多い。下痢の回数が多いこともあるし少ないこともあるが、水様便か、不消化便のことが多い。下痢すると冷える。</p>		
弁陽明病脈証併治第八第47条（傷寒論）		
「脈浮にして遅、表熱裏寒す。下痢清穀する者は四逆湯之を主る。若し胃中虚冷し食す能わざる者は水を飲めば則ち嘔す。」		
<p>解説 脈が浮いて遅である。脈の浮は表熱であり、脈の遅は裏寒である。不消化便を下すものは四逆湯が主治するのである。もし胃中が虚して冷えている者が水を飲むと、更に胃が冷えてシャッキリをするようになる。</p> <p>遅脈は寒を現わす。脈浮は表証ではなく、内に寒があつて、虚陽浮越、裏寒表熱のための浮脈である。ここでは虚陽浮越が著しいための浮脈で、陰寒が内にあつて脈屋で、脈細で無力である。清穀下痢、虚陽浮越の裏寒表熱は、少陰病よりも更にひどくなった厥陰病で見られる病状であり、四逆湯で急救回陽する。もし胃中が虚して冷えている者が水を飲むと、更に胃が冷えてシャッキリをする様になるのである。</p>		
弁太陰病脈証併治第十第5条（傷寒論）		

「自痢、渴せざる者は太陰に属す。其の臓に寒有るを以ての故也。當に之を温むべし。宜しく四逆輩を服すべし。」

解説 自然に下痢をして、咽の渴きを訴えない者は、太陰病である。その理由は内臓（脾、肺）に寒があるからである。当然、温めてやるべきである。四逆湯類を服用させるのがよい。

四逆湯の類は、四逆湯・通脈四逆湯・四逆加人参湯・茯苓四逆湯などを指す。

弁少陰病脈証併治第十一第 43 条（傷寒論）

「少陰病、脈沈の者は急に之を温む。四逆湯に宜し。」

解説 少陰病で、脈が沈んでいるのは、裏が冷えているのであるから、急いで温めてやるべきである。それには四逆湯がよい。

弁少陰病脈証併治第十一第 44 条（傷寒論）

「少陰病、飲食口に入れば則ち吐し、心中温温として吐せんと欲し、復た吐する能わず。始め之を得て手足寒え、脈弦遅の者は此れ胸中実す。下す可からず也。當に之を吐すべし。若し膈上に寒飲ありて乾嘔する者は吐す可からざる也。急に之を温む。四逆湯に宜し。」

則ち、温温として、復た吐する能わず、寒え、下す可からず、當に

解説 少陰病で、飲食物を口の中を含むとすぐに吐いてしまい、胸の中が蒸される様にムカムカとして吐きたい様であるが吐けないで、発病の始めから手足がこごえて、脈が沈んで遅いものは、胸中に病があつて実している時には、下しをかけてはいけぬのである。もしもその場合に、寒によって水の停滞があつて乾嘔のある者は、吐かせてはいけぬのである。当然温めてやるべきである。それには四逆湯がよいのである。

少陰病で、脈が弦遅である場合、脈弦は痰飲、脈遅は寒の存在を示す。胸中に寒があり、このために痰飲が増加して、寒痰実邪となり、気の流れが阻滞し、衛気が塞がれて胸中痞硬し、飲食物を口の中を含むと、すぐに吐いてしまい、胸の中が蒸される様にムカムカとして吐きたい様であるが吐けない症状が発生する。この様な場合には、下してはならず、瓜蒂散を用いて吐かせるとよい。この場合には、痰飲が胸中を塞ぐと衛気が全身に発散出来なくなるので、体表を防御、温養出来なくなることにより、手足の冷え、悪寒、微発熱、自汗も発生する。桂枝湯証の太陽中風に似ているが、頭痛、項背強の症状はない。

胸中の寒飲の停滞は、少陰陽虚に於いても発生する。陽気は水穀を腐熟したり、水液を宣散、肅降により蒸化布する作用があるが、少陰陽虚で脾腎陽虚になると脾の運化障害により水穀を腐熟することが出来なくなったり、また水液を気化することが出来なくなるので、清穀下痢を起したり、胸に寒飲が停滞して、乾嘔（吐きたくても吐かない）して、苦しむ状態を呈する。また陽気が四肢に循らないので四肢厥冷となる。脈は必ず沈で微細になる。この様な状況の場合は、陽気を更に損傷しないように吐かしてはならず、四逆湯を用いて、少陰を温めて、寒飲を取り去る。

四逆湯の附子は少陰を温めて回陽し、乾姜は温中して寒を散じ、炙甘草は和中補虚し、全体で回陽救逆する。

弁厥陰病脈証併治第十二第 27 条（傷寒論）

「大いに汗出で熱去らず、内拘急し、四肢疼み、又下痢厥逆して悪寒する者は、四逆湯之を主る。」

解説 大汗が出て解熱しないのは、表証ではなく厥陰病の仮熱である。そしてこの大汗も厥陰病の発汗である。陽虚寒盛で、寒は凝滞し易いので、気の流れが滞って、内に腹中拘急、外に四肢疼痛が生じる。また水様性下痢、四肢厥冷、悪寒もある。四逆湯で、陽を復し寒を散じ急救回陽する。

弁厥陰病脈証併治第十二第 28 条（傷寒論）

「大いに汗し、若しくは大いに下痢して厥冷する者は四逆湯之を主る。」

解説 発汗、下痢がひどいために陰液を損傷して脱水が甚だしくなり、また陽気衰亡して四肢厥冷する者は、四逆湯で急救回陽する。

弁厥陰病脈証併治第十二第 47 条（傷寒論）

嘔吐噦下痢病脈証併治第十七第 39 条（金匱要略）

「下痢、腹脹満、身体疼痛する者は、先ずその裏を温め、乃ち其の表を攻む。裏を温むるは四逆湯、表を攻むるは桂枝湯に宜し。」

解説 下痢をして腹が張ってふくれ、身体がうずき痛む者は、先ず裏を温め、裏が温まったならば、その後で表を治療しなさい。裏を温めるのには四逆湯がよい。表を治療するのには桂枝湯で発汗してやればよいのである。

下痢をして寒凝気滞して腹脹満（腹が張って膨れる）のものを厥陰病の病証と捉え、身体疼痛（身体がうずき痛む）のものを太陽表証と捉えている。この様な場合は、先ず裏を温め、裏が温まったならば、その後で表を治療するべきである（先裏後表）。裏を温めるのには四逆湯がよい。表を治療するのには桂枝湯で発汗してやればよいのである。

表証と裏虚が同時にある時には、裏虚を先に治して、その後に表証を治療する（先裏後表）。先に治療しなければならぬ裏虚を差し置いて発表解表を先にすれば、病状が悪化して虚脱（ショック）を起こしてしまう。

参考 真武湯証は、陽虚裏寒証の中間位の症状の時に用い、茯苓・白朮・附子の総合作用より、広範囲に水が停滞してその証を現わしている。真武湯証より軽い時は、茯苓・白朮配合の苓桂朮湯や桂枝去桂加茯苓白朮湯を用いる。真武湯証より重症になると附子湯、更に重症の時は四逆湯を用いる。乾姜附子湯は、四逆湯（乾姜・附子・甘草）と比較すると、緩和作用のある甘草を除いて、消陰回陽の作用を迅速に發揮する。裏寒証が更に進んで、表熱を現わす様になると通脈四逆湯や白通湯を用い、これらに血虚まで加わると白通加猪胆汁湯を用いる。これらの方剤の他に茯苓四逆湯、四逆加人参湯、通脈四逆加猪胆汁湯なども裏寒証に用いる。

弁厥陰病脈証併治第十二第 52 条（傷寒論）

嘔吐噦下痢病脈証併治第十七第 16 条（金匱要略）

「嘔して脈弱く、小便復た利し、身に微熱有りて厥を見ず者は治し難し、四逆湯之を主る。」

解説 吐き気があつて、または嘔いて、脈が弱くて、その上に小便の出がよくて、身体に微熱があるなど、陽気がひどく消耗された厥陰病では、手足に陽気が循らなくなるので、温煦されないために手足がひどく冷えて難治である。四逆湯で急救回陽する。

微熱は命門の孤陽が浮昇したもので、実熱では無い、故に難治である。

参考 厥陰肝経と少陽胆経とは表裏をなし、厥陰経・少陽経の各部位は肝の支配により働いている。故に肝が虚すと、これらの部位に外邪や太陽経で発生した熱邪が侵入し易くなる。これらの邪を少陽経が受け止めると少陽病となり、一部厥陰経に熱が入ると血熱となるが、この様な場合の治療はいずれも少陽病として治療すると完治する。

厥陰病では、肝の疏泄機能（気を循らせる働き）が失調し、気の流れが鬱滞し、臟腑の活動が障害され、陰陽の平衡が失調するために痰飲、食滯、肝鬱が生じ、熱邪などの実邪が体内に留まるために、陽気の四肢への流れを阻害し、厥に加担する。またこの肝の疏泄不利により、脾胃の機能に影響を与えて（肝胃不和、肝脾不和）、嘔吐、下痢が生じることに加担する。

弁霍乱病脈証併治第十三第 8 条（傷寒論）

「吐痢、汗出で発熱悪寒、四肢拘急、手足厥冷する者は四逆湯之を主る。」

解説 吐き下して、汗が出て治らずに、熱を發し、悪寒して手足が引きつり、手足の先から冷える者は、四逆湯が主治する。

この場合の發熱、悪寒は表証ではない。

嘔吐、下痢、発汗して陰液の脱水が激しく、虚陽浮越して發熱する（表証の發熱ではない）。厥陰病では、陽気不足で手足が厥冷するだけでなく、体表の衛陽の温煦作用が働かなくなるので寒がる（悪寒）。また陰液不足で筋脈が栄養されないため、四肢のひきつれ（拘急）を起こす。四逆湯で急救回陽する。

「既に吐し且つ痢し、小便復た利して大いに汗出でて下痢清殺し、内寒外熱、脈微絶せんと欲する者は、四逆湯之を主る。」

解説 すでに吐いて、その上に下痢をしてしまったが、それまで小便の出も悪かったものが再び小便が出だし、それから大いに汗が出て未消化便を下痢するような場合には、内が冷えていて外に熱が浮いているのである。脈が微かで絶えそうになる者は、四逆湯が主治する。

この様な状態は、身体の水分が枯渇してしまっている。そして陽虚で、内寒であるということである。

苓桂朮甘湯証の場合は、吐かしたり下したりして、上焦（心）の陽気と共に、中焦（脾胃）の陽気が虚し、心陽が下焦（腎）へ行けなくなり腎陽を温めることが出来なくなり腎陽虚となり、腎水の水気が勝手に衝逆して病となったものであるが、

真武湯証の場合は、この苓桂朮甘湯証の場合よりも、上焦（心）、中焦（脾胃）の陽気不足、および腎陽虚の程度が一段とひどくなった状況で、少陰の腎陽が虚すと、膀胱の気化作用が障害されて小便不利となる。

ところが腎陽が更に虚して四逆湯証になると、陽気の昇清作用までもが傷害されて薄い尿が沢山出してしまう。また陽気の衰弱がひどいので、衛気の固摂が障害されて、腠理が開きっぱなしになり、また陰寒によって追い出された陽気の居場所が無くなって外表に浮上して来る（虚陽浮越）ことにより大いに汗が出る。寒がるが体に触ってみると冷たくはなく微熱がある。即ち、内真寒外仮熱となる。また、陽気は水穀を腐熟したり、水液を宣散、肅降により蒸化布する作用があるが、脾腎陽虚になると、脾の運化障害により水穀を腐熟することが出来なくなり、また水液を気化することが出来なくなるので、水様性の清穀下痢（不消化下痢）となる。

「脈微絶せんと欲する」とは、脈がやっと微かに触れる状態で、この脈は四逆湯証より更に重症の通脈四逆湯証である。